



観光セミナー・商談会

～ブルネイ・ダルサラーム大使館～

先月10月30日、ブルネイ大使館で観光セミナー・商談会が開催された。IFAでは1985年に「ジュニア大使友情使節団」を創始し、米国、英国、オランダ、マレーシア、中国、ニュージーランド、カナダ、パラオと派遣してきたが、2018年に初のブルネイ班を組織し、翌19年と、ジュニア大使を派遣し、交流の成果を上げた。ここ4年間は、コロナ禍で中断していたが、24年夏にはブルネイ班を組織する予定。そのため、同セミナーに参加し、最新の現地情報を得た。ここに参加の様子を紹介する。

◇

日時：10月30日（月）14:30～17:30
会場：ブルネイ・ダルサラーム大使館
（東京都品川区）

プログラム：

開会／第一次資源・観光省 事務次官
Her Excellency, Ms Tutiaty
Abdul Wahab
・ブルネイ観光最新情報

- ・ロイヤルブルネイ航空の最新状況
 - ・質疑応答
休憩（ブルネイ料理、菓子、飲み物）
 - ・ネットワーキングセッション
（観光開発局スタッフと参加者交流）
 - ・商談会（ブルネイ訪問プログラム）
- 閉会／ブルネイ・ダルサラーム代理大使
Mr Peniran Amir Johan Pg
Ismail



ブルネイ料理

◆ブルネイ・ダルサラーム国

東南アジアのボルネオ島北部にある国で、総面積は日本の三重県とほぼ同じ5,765 km²。人口約44万人。首都はバンドル・スリ・ブガワン。公用語はマレー語だが、英語は広く通用しており、国民の80%がイスラム教（国教）を信仰している。日本からはロイヤルブルネイ航空の直行便で約6.5時間、日本との時差は1時間。

14世紀末ごろに現代に続く国の礎が築かれ、19世紀末に英国の保護領となる。太平洋戦争勃発に伴い1941年から45年までは日本の統治下。59年、

英国の自治領となり、84年に独立。

石油や天然ガスなどの豊かな資源に恵まれ、アジアの国民一人当たりの名目GDPはシンガポール、香港に続く3位。日本へは石油や天然ガスを輸出しており、中国と並び最大の輸出相手国となっている。

国名の「ダルサラーム」とはアラビア語で「平和な土地」を意味し、色とりどりの動植物に満ちた肥沃な自然が残り、熱帯雨林が生い茂る、美しいイスラム教国。

◆渡航情報とジュニア大使訪問概要

前回のジュニア大使訪問時と大きく異なるのは、入国に際して、事前に「E-Arrival Card」というオンラインでの登録申請が必要なこと。その受付番号を入国の際に提示する必要がある。14日未満であれば、滞在許可手続は不要。

ブルネイには電車はなく、旅行者はタクシーを利用するのが一般的。配車アプリDARTなどで目的に応じて車を事前に手配する必要がある。

自然、エコ、熱帯雨林、人のやさしさにあふれており、「国中、皆親戚」という言葉もよく聞かれる。

ジュニア大使プログラムは、現地でも、ボルネオ杉など自然を観察し、テングザル、バードウォッチングも行う。ハイライトは学校交流とホームステイ。さらに、これまで2回の訪問では、ハサナル・ボルキア国王の誕生日イベントに飛び入り参加している。

世界万華鏡

“中国便り” その8

東京大学医科学研究所

特任教授

はやし みつえ
林 光江

中国国家衛生健康委員会は9月20日から「サル痘」*を法定伝染病の乙類に追加すると発表した。中国の伝染病予防法では、感染力や症状の重篤性などから、感染症を甲類、乙類、丙類の3種類に分類している。現在のところ甲類伝染病はペストとコレラのみで、乙類にはエイズ、肝炎、鳥インフルエンザ（高病原性と低病原性に分類）、肺結核、新型コロナウイルス感染症など27種の感染症が指定されている。

「サル痘」は昨年5月から世界的な流行が起き、同7月にWHOが「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言した。しかし、今年5月には世界的な感染者数の減少を受けて、この緊急事態宣言を終了した。

一方、中国では今年6月から国内での流行が始まり、WHOの宣言解除と逆行するような動きを見せている。6月には広東省、北京市を中心に106件、7月には23の省（含む直轄市、自治区）で491件、8月になると25の省（同）で計501件の感染者が報告された。この3か月で1,000件を超す感染が出たことが、9月の「サル痘」を乙類伝染病に指定した主な理由と思われるが、注目されるのが8月に報告された501

件のうち5件が女性だったことだ。これまで中国国内では感染症のほとんどが同性間性交渉歴のある男性だったが、今回新たに女性の感染者が確認されたことで、局面が変わったと見たのだろうか。5名の女性は21日間以内に異性との性的接触があったと言われているが、感染原因はまだ特定されていない。中国政府の「サル痘」感染対策部門は、この女性感染者の出現によって、今後家庭内などにおける子供や高齢者への感染拡大を警戒しているようだ。

厚生労働省のWebサイトでは「エムボックス」*の感染経路について次のように記載されている。

【アフリカに生息するリスなどの齧歯類（げっしるい）をはじめ、サルやウサギなどウイルスを保有する動物との接触によりヒトに感染する。

また、感染した人や動物の皮膚の病変・体液・血液との接触（性的接触を含む）、患者との接近した対面での飛沫への長時間の曝露（ばくろ）（prolonged face-to-face contact）、患者が使用した寝具等との接触等により感染する。】

ここにもあるように、男女にかかわらず皮膚の病変や体液、血液の接触を通して感染する可能性がある。また中

国では時折ベストの症例が確認されることから、「サル痘」ウイルスがネズミなどの齧歯類によって運ばれる可能性も否定できない。

HIV/エイズが当初、男性同士の性交渉のみによって感染すると誤解され、のちに感染拡大につながったことを考えれば、今回「サル痘」の乙類伝染病指定により、早い段階で女性や子供にも感染の危険性があると周知することは理にかなっている。今後の推移を注視したい。

*注）「サル痘」、「エムボックス」：「サル痘」の名称は偏見を生むという理由から、現在では「Mpox」、「エムボックス」、「M痘」などの呼称が通例となっているが、中国では依然として「猴痘」（猴＝サル）を使用しているため、本稿では「サル痘」という表記を使用する。

（アジア感染症研究拠点『北京駐在スタッフの随想』2023.9.25より抜粋）

令和5年11月17日発行
一般社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ703
発行責任者：及川 伊佐子
編集：事務局 03(3582)3021
印刷：ダイト印刷株式会社